

行白-157

課	佐和	長	連	帶
(印)	(印)	(印)	(印)	(印)

留四調第二二號

沖繩戦に於ける歿死者の遺骨(体)等の資料送付について

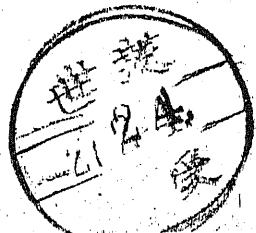
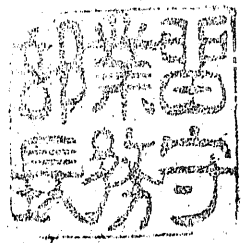
昭和二十七年一月三十一日 留守業務部長

茨城縣世話課長殿

標記の資料別冊の通り送付する

送付先

- 復員局
- 連絡局
- 支部
- 世話課
- 舞復
- 部内各課
- 二復(参考)



沖繩戦に於ける

戦死者の遺骨(体)等の状況について

昭和二十六年十二月七日

留守業務部

目次

一、	地誌	
二、	陣地設備の状況	
三、	遺骸に就て	
四、	沖繩作戦經過概要	
附圖		
第一	首里山北側斜面兩口部	
第二	沖繩戦に於ける戦死者数及び位置概況図	
第三	沖繩作戦（軍主力）經過要図	
第四	國頭支隊戦斗經過要図	
第五	軍主力方面部隊別地域別戦死者数概見図	
第六	國頭支隊主力方面戦死概況図	
第七	慶良間諸島戦死概況図	

沖繩本島は南北約百二十料東西十乃至二十料の狭長な島で戦前は北部が國頭郡中央部が中頭郡南部が島尻郡となり三郡に行政を劃されていた。

島の北半部（國頭郡と中頭郡の北部）は森林の多い標高二乃至四百米の山地よりなり平地は僅かに名護町附近に在るのみである。島の南半部（中頭郡中南部と島尻郡）は小高地を有する珊瑚岩の丘陵地帯を形成し山陽沿線の如くよく開墾されている。最後の戰場となった島尻郡南岸地帯は数十米の断崖海上に屹立して連らなり白波を啗んで壯觀である。

沖繩本島特に南半部は戦前の陸地測量部の地図で想像したり或は戦前の記憶で考えたりするものとは著しく変貌している。米軍四十万屯、日本軍二万屯の鉄量爆薬を地上に存在する一切の物は粉碎焼盡した。そして其の跡に米軍が機械力に物言わせて縦横に新設した自動車道や飛行場、新に再建されつゝある郡市村落など吾々の手にする地形図では見当がつかないであらう。

島民中老年層には沖繩伝来の言語風俗の者が稍、多いが大抵は本土日本人と変ることなく沖繩戦の際は全島民言語に絶する激烈な戦いに参加し「億王碎」の標語を死んで文字通りに実践したのは沖繩島民のみだと謂つても過言でない。

人口は戦前四十数万で人口密度は非常に高く特に主戰場となつた島尻郡に於て甚だしく住民地が密集していた。海外移民に沖繩島民が断然多いのは改ざしとしない。戦中中は島外疎開と北部地区への疎開で中南部地区の人口は十万余減つたがそれでも尚十数万の老幼婦女子が直接主戰場内にあつて三ヶ月の間彼我激闘の裡を彷徨した。

気候は緯度の關係上勿論温暖である。五、六月と十一、十二月の候に雨量が多く八、九月の頃頻りに襲来する台風は沖繩の名物となつている。其の他の季節は氣候頗る快適で米軍が沖繩に上陸した三、四月の候が最も良い。

二 陣地設備の状況

米軍の物資攻撃に對抗する為当時の戦訓を嚴守して陣地は全部地下に組織した戦艦の主砲や一屯爆弾に抗する(当時軍参謀長は「之を嘲笑する」と表現した)如く高地丘陵の山腹を利南し十乃至三十米の掩護高を有する坑道を掘削し之に十萬の兵員と其の兵器彈藥食糧等悉く收容した。此の坑道の總延長は百數十裡に達した筈で軍主力の陣地のあつた島尻郡は殆んど全域峰の麓の如く縱横に地下坑道が掘り鏡りされ首里山の下だけでも軍司令部、師団司令部、砲兵司令部等人員約三千を收容する陣地ができていた。日本軍が以上の陣地を構築するのに都合の良かったのは沖繩独特の墓地と自然洞窟等に後者である島の南半部は珊瑚岩より成つていて南係上自然洞窟に恵まれ其の数は南に至ると從ひ増加し最後の戰場となつた南部海岸地帯には二、三百名も收容する洞窟が尠くなく兵力の増加や取用が多かつたので作戦準備の大規模な変更を時々餘儀なくされ陣地設備や訓練の未完成の儘戦斗となつたので希望していた対戦車障碍特に戦車壕などは奇地に小規模なものを構築したに止まり又一連の対戦車地雷地帯などは設置し得なかつた。

三 遺骸に就て

沖繩戦の死者は軍人約七万五千非戦闘員数方である。是等戦死者の大部分は本島南半部で一部が伊江島本部半島、八重岳附近、タニヨ岳、恩納岳、石川岳を各中心とする圓頭山地帯並びに慶良間諸島で整北の遊撃戦、挺進隊部隊、海上挺進隊隊等の比較的少數の戦死者は沖繩本島の全域並びに其の周辺の小島嶼等に散在して居る筈である。昭和十九年十月十日以降翌二十年三月末頃迄の零次の大空襲や其の他の事故に因る戦死者約一千名は各部隊に於て夫々埋葬し墓塚を建立した。那覇市東郊の軍司令部所在地(蚕種試験場)北側には陸軍墓地が設定されていた。然し米軍上陸以後は日夜前断ない砲爆撃下に死斗を継続したので戦死者を埋葬する餘裕はなかつた。たとへ一部埋葬し得たとしても其の後の砲爆撃で多くは粉碎されたと相当の兵器彈藥を保有していたから寧ろ米軍側の損害が多かつた後半精兵覺ふれ兵器彈藥盡きるに從い加速度的に我が軍の損害は増大した従つて沖繩戦の最大激戰場であつた首里北方陣地帯に於ける戦死者數に比し同陣地帯以南の方が比較的に多い。

沖繩島南部の主戰場では日本軍の大部は地下陣地に據つて戦つたので砲爆に因る陣地の崩壊、米軍戦車の火砲攻撃、地上地下の内溝戦等の戦死者の半數は坑道内に斃れたものと推定される。傷つき力盡きて壕内で自決した者も亦尠くはない。勿論当時暗黒な坑道内よりひろくとした地上に出て死にたいとは殆んど全戦士員の共通した願望ではあつたが——従つて戦後の今日に於ても地下陣地には多數の遺骸が存在するであらう。

地表面上の戦死体は戦斗中彼我大規模な砲爆撃、尺寸の地を争う死斗の爲紛碎埋没したものが多く戦後沖繩島民が都市村落の再建、農耕地の復活或は無名戦士を祭る為等大部は清掃したものと考えられるし又現地よりの通信が乏を証明している戦斗中でも米軍が其の占領地域の拡大と連れ住民を使役して我が戦死者を假埋葬したよりであつた。

以上のような諸条件や断片的ではあるが現地よりの通信などを綜合判断するに地表面上の遺骸は住民地や農耕地帯(主戰場は殆んど斯かる地方であつた)では略々整理されたものと考へて誤りはない。然し右以外の地域即ち主戰場方面では南海岸の断崖地帯に今尚無数の遺骸が在りし昔のまゝに軍装をつけて白骨、「ミイラ」となつて放置されていることは確實であり更に「年座岳、八重岳附近」、「小糸飛行場東方山地」、「糸敷高地より所々森に至る山地」、「首里西北四料伊視附近」、「首里東北辨ヶ岳附近」、「上原高地より島袋附近に至る山地」等の遺骸処理は不十分と思われ、尙支作戦方面の山地帯でも略々同様の状態と推定される。現地人の話に依れば比較的整理のできた地方でも所に依つては死骸が防空壕などに累々と投入積み重ねられて居るとのことである。

要するに激戦地必ずしも戦死者多からず、戦死者多き所必ずしも遺骸放棄率大ならず、過去の記録で現状を揣摩臆測するよりは百師は一見に如かずである。現地に出かけて踏査すれば数名の人員と比較的短時日とを以て一切は明瞭となり祖國に殉せる尊き遺骸の埋葬収集の計画はたちどころになり又其の実行は右人員を基幹とし事情に通じた現地民の協力に依り若干の資材の準備と相俟て容易に完成せられ遺族率いては一般國民多年の念願を果すことができるであらう。

尚戰鬥中皆認敵衆を著けていた筈であるが原裝が消失しているのので之が認定の術なかるべく現地視察や作業にあたっては地雷、手榴彈、不発砲彈、爆雷等無数に今尚旧戰場に散在して居る筈だから危険予防には万全の注意を要するし実行の時機は一月乃至五月頃が天候上最適である。

四 沖繩作戰經過概要

(一) 沖繩作戰軍の由来

南西諸島全般防衛の善渡中將を司令官とする第三十二軍が編成されたのは昭和十九年三月であつた。當時南西諸島は全く無防備で沖繩本島の如きも装備貧弱な数百名よりなる要塞部隊があつたのみである。三月下旬紙の上では軍が編成されたが兵力が島に到着し始めたのは同年七月「マリヤナ」防衛線が崩壊した後で第九、第二十四、第六十二師団、独立混成第四十四旅団、重砲兵隊等予定兵力が概ね集結を完了したのは九月上旬で軍司令官は牛島中將に軍參謀長は長少將に代つた。そこで米軍が來攻したら我が海・空軍と協力し之を撃滅する決戦方針の下に本格的な作戰準備を始めた。

作戰準備は順調に進捗し全軍漸く必勝の信念を得つ、あつたが十一月比島の戰鬥が酣となるに及び第九師団を抽出されることになり軍の作戰準備は根本的に変更しなければならなくなつた。持久方針の新作戰構想が確定したのは十一月下旬で各部隊が新陣地に就き準備を始めたのは昭和二十年の正月であつた。是れは軍にとつては形而上下共に致命的な痛手で不十分な作戰準備と著減した兵力とを以て今年三月下旬大膽的な戰鬥に突入したのであつた。此の同情況を急迫すると共に沖繩島中十七才より四十五才までの男子を

(二) 作戰要領

極力長期に亘り持久し且米軍に出血を強要し本土決戦を容易ならしむることを主眼とし概要の如く作戰を準備した。

- 一 國頭支隊の主力を以つて伊江島と本部半島を守備し努めて永く伊江島飛行場を確保し止むを得ざるに至れば國頭地区に遊撃策動し軍主力の作戰を容易ならしめる。
- 二 海上來進部隊を慶良間島と本島南半部海岸に配置し空軍特攻隊と協力し米軍上陸船団を極力海上に於て撃滅を企図する。
- 三 軍主力は我如古東西の線以南沖繩南部に陣地を占領し若し米軍が我が主力沿岸に上陸する場合は該正面に我が戦力を機動集中し之を海岸地帯に於て撃滅し又我如古以北の海岸に上陸する場合は首里北方陸正面陣地帯に於て持久戰鬥し且米軍に出血を強要する。

(三) 作戰經過概要

昭和二十年三月二十三日早曉より米軍は先ず其の機動艦隊を以て沖繩島の攻撃を開始し戰艦、重巡各十数隻基幹の大艦隊を以てする艦砲射撃並びに一日延二千機内外の艦載機の爆撃を連日継続した。

三月末に至る間軍は慶良間島を奪取されたのみで損害は殆んど皆無である軍は米軍の主上陸を嘉手納海岸一部上陸を南方桑川海岸と予想し首里北方陸正面の戰鬥を準備すると共に米軍が桑川正面一部上陸し來たるときは之を各個に撃滅する如く待機した。

四月一日早曉米軍第十軍は鉄砲的砲爆撃の後嘉手納沿岸一帯に上陸し第二十四軍団は逐次軍主力方面に又海兵第一軍団は國頭地区に急進撃した。

上陸地附近に在つた特設第一聯隊(青標中佐指揮下の飛行場関係部隊)は飛行場東方ニニ。高地に次で石川岳に後退し又賀谷支隊(第六十二師団の独立歩兵第十二大隊)は巧みに米軍の先鋒に痛撃を加えつ

つ軍主力陣地に後退した。

三、四月六日頃米第二十四軍団は南下して我が主力陣地に衝突し激闘が開始された。爾來四月二十六七日頃迄上原、我如古、嘉敷、牧港の線に於て第六十二師団所屬の歩兵第六十三旅団は軍砲兵隊と協同して善戦し米軍に多大の損害を与えた。

此の同四月八日大本營の意圖に基き軍全力を以てする總攻撃を計画したが之を中止し十二日歩兵第六十四旅団の三ヶ大隊と第二十四師団所屬の歩兵第二十二旅隊の一部とを以て夜襲を決心したが多大の損害を蒙り不成功に終つた。又團頭支隊主力は海兵軍団の攻撃を受け四月十六日八重岳の守備を失ひ夕二日岳方面に駆進して遊撃戦に移行し二十日には伊江島守備隊が第七十七師団と對戦奮闘して全滅した。船舶工兵第二十六旅隊の西園少尉が部下小隊と糸満漢夫の一団を率ひ那覇西方海面の慶伊勢島の米軍砲兵部隊に対し剛膽な奇襲を敢行して成功したのは四月九日夜であり中城湾口に在る津堅島守備隊が攻撃を受け後退したのは十日である。

四、米軍は四月下旬宜野灣―首里街道以西我が左翼歩兵第六十四旅団正面に新に海兵第一軍団(三ヶ師団)を増援し更に右街道以東歩兵第六十三旅団正面の米第二十四軍団は四ヶ師団に増強され我が第一線陣地は逐次蚕食せられる状況となつた。

茲に於て軍は第二十四師団を那覇、糸満方面より歩兵第六十三旅団の後方我射、小波津、幸地、前田の線に又獨立混成第四十四旅団を如念半島方面より歩兵第六十四旅団の後方天久台に夫々進進して嚴密な第七十六師団の戦力を継承する如く部署した。

五、五月に入ると軍司令官は我が主力が未だ無傷の間に攻勢に転じ敵を撃破するに決し五月三日末明全軍砲兵百數十門の壯絶な砲撃射撃の下先づ第二十四師団が上原高地一帯の敵に対し攻勢に転じた之に呼応する如く船舶工兵第二十三、第二十六旅隊を基幹とする並上陸部隊は東西両海岸より敵後方深く侵入攻

受け我が損害甚大にして攻撃奏効せず軍司令官は五月四日夕遂に攻撃を中止するに決し全軍再び持久態勢に復帰した。

六、五月三日の攻勢失敗後は軍の戦力頓に低下し敗色漸く兆し始めた。然し第一線諸隊は志気尚旺盛で右翼第二十四師団、中央第六十二師団を翼混成旅団相並列し軍砲兵隊協同の下克く奮戦持久した。

五月中旬以後は各兵団消耗の消甚大なので海軍部隊や後方諸部隊を投入して戦勢の挽回に努めたが我が陣地は日毎にじり／＼と蚕食され特に東西両海岸地区が危険となつた。

七、五月下旬軍司令官は首里陣地帯の崩壊するに先立ち喜屋武半島地区に後退して最後の戦闘を爲すに決し五月二十九日以後各兵団は地或的持久抵抗を行いつゝ喜屋武半島の新陣地に撤退した。

八、六月四、五日頃迄に軍主力は米軍と巧みに離脱し新陣地に就いた。即ち混成旅団は八重瀬岳より右翼湊川正面に第二十四師団は与座岳より左翼糸満南側海岸に陣地を占領し第六十二師団は予備兵団として概して撃文仁、喜屋武向の地区に集結した。

海軍部隊は司令官太田少將の企圖に基き依然小祿地区に止まり之を死守するに決した。

九、南下追撃して来た米第十軍は第二十四軍団を以て六月七、八日頃より具志頭附近混成旅団に又海兵第一軍団を以て六月十二日頃より糸満南方我が第二十四師団に夫々猛攻撃を開始した。

之より先在小祿海軍部隊は十一日司令官太田少將自決し概ね全滅した模様である。軍は混成旅団の正面先下危険なるを知り十二日頃より第六十二師団を逐次該正面に移動して対戦させると共に後方部隊を擧げて之に投入した此の頃諸隊は兵器彈藥盡きて殆んど徒手空拳であり米軍の物量攻撃に抗する術なく空しく死するもの算なし。切齒、扼腕、悲涙を呑むの外であつた。

第二十四師団は当初数日間は海兵軍団と有利に對戦してはいたが戦力の劣勢止むなく十六、十七日頃より所々陣地を突破せられ且右翼混成旅団の敗勢に捲き添えを喫し十八、十九日頃には愈々危険となつた。

十、六月二十日頃全軍の陣地は崩壊状態となり軍司令官の統一指揮が不可能となった。依つて軍司令官は全軍に告別し所在高級指揮官の指揮に従い各個に戦斗を継続する如く命じ自らは二十三日午前四時三十分奪文仁山上に於て自決された。

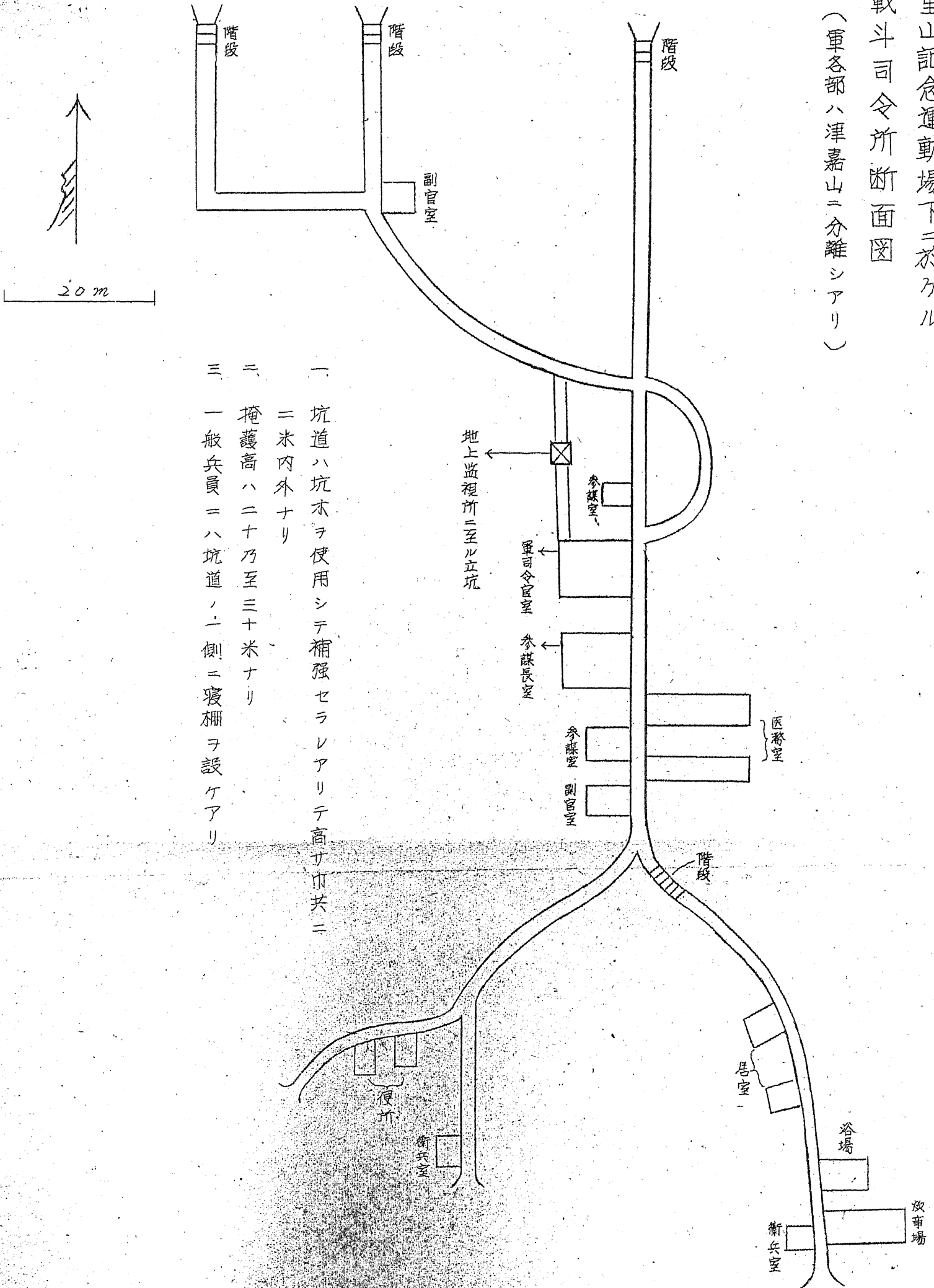
爾後部分的戦斗は六月末頃迄に統さ次で遊撃戦に移行し終戦に至った。

附圖第一

首里山記念運動場下ニ於ケル
軍戰鬥司令所断面図

(軍各部ハ津嘉山ニ分離シアリ)

首里山北側斜面開口部



- 一 坑道ハ坑木ヲ使用シテ補強セラレアリテ高サ巾共ニ
二米内外ナリ
- 二 掩護高ハ二十乃至三十米ナリ
- 三 一般兵員ニハ坑道ノ一側ニ寢柵ヲ設ケアリ

首里山南側斜面開口部




沖縄戦ニ於ケル戦死者数及位置概況図



約300,000

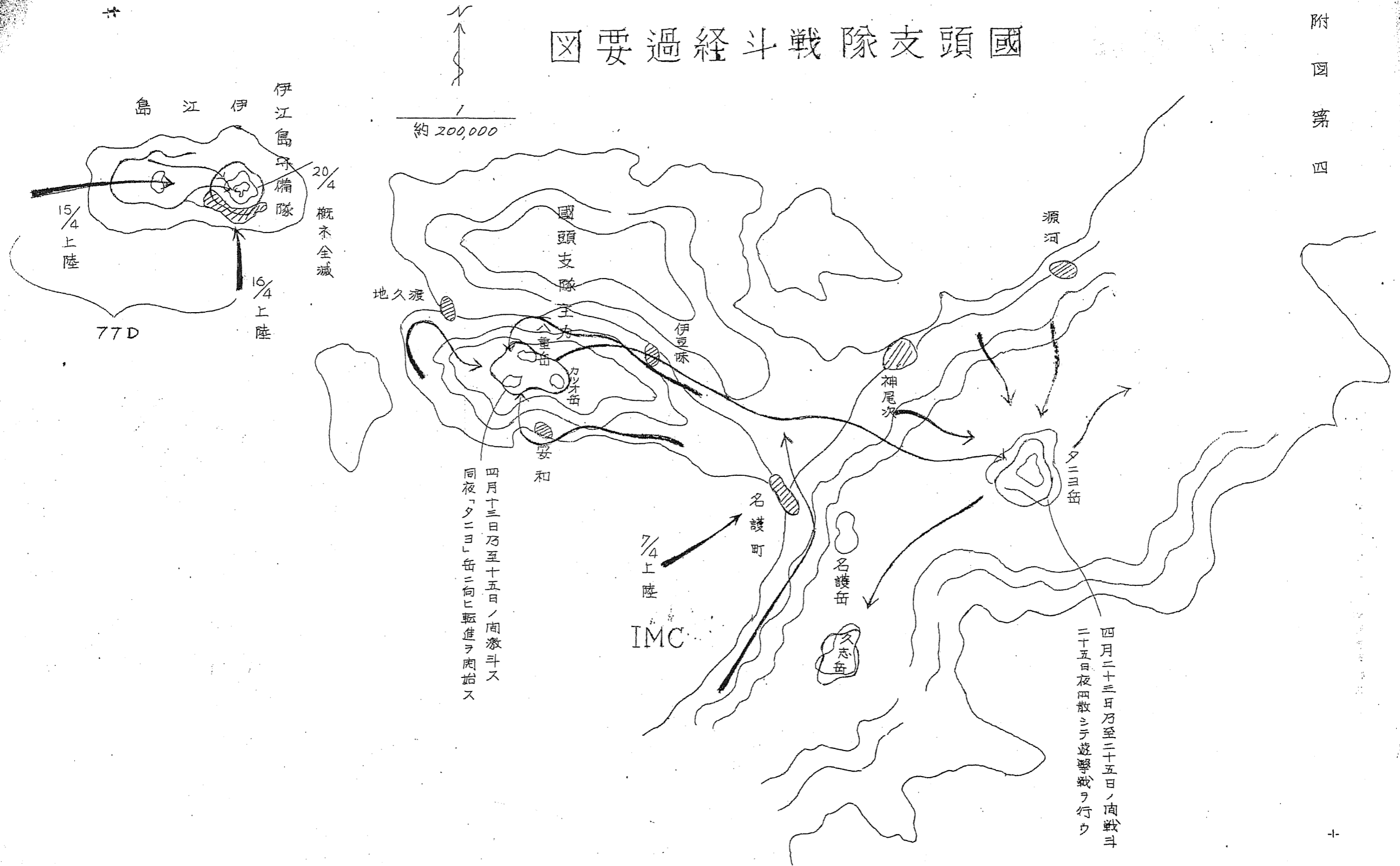


備考

-  戦死者密集地域
-  部隊戦斗ニ因ル戦死者相当数予想セラルル地域
-  遊撃的戦斗ニ因ル戦死者散在ヲ予想セラルル地域



國頭支隊戰鬥經過要圖



慶良間諸島戦死概況圖

注意 正確なる地図並に資料なく戦死数は全く推定に
基くものなり

座間味島部隊戦死数



第一戦隊	七五
基地隊の一部	一八〇
水動一〇三中	一六〇
防衛隊	六〇
計	四七五

渡嘉敷島部隊戦死数

第三戦隊	七〇
基地隊の一部	一五〇
水動一〇四中	一四〇
防衛隊	五〇
計	四一〇

河嘉島(慶留間島)部隊戦死数

第二戦隊	六〇
基地隊の一部	一四〇
水動一〇三中	一三〇
防衛隊	四〇
計	三七〇

備考
 は守備隊
 は敵進行状況
 を示す

